

## 青年劇場「あの夏の絵」観劇のお奨め

私は13才、旧制中学1年の8月6日午前8時15分、広島市段原中町（爆心地より東に約2キロメートル）の自宅で被爆した被爆者です。東京在住約5400人の代表です。一発の原子爆弾で約350人の友人・先生・知人を亡くしました。広島街も一瞬のうちに焦土と化し、その年のうちに身内も放射線の影響で2人亡くなり、市民35万人の内14万人が亡くなりました。見たこともないような大ヤケド・大ケガをした人が目の前で次々に亡くなりました。13才の子どもにとって耐えがたい初めての経験です。亡くなった人を学校の校庭でまるでゴミでも焼くように茶毘に付した光景、臭いは72年たった今も忘れることはできません。私自身も、歯ぐきからの出血、髪の毛は全部抜けました。

広島基町高校美術部員の生徒さんが、自分のおじちゃん・おばあちゃんぐらいの年のはなれた被爆者と膝を交え、何度も何度も繰り返し、被爆当時体験した話を聞き、それを自分のものとして、絵で表現する。それは相当な覚悟と努力があったと思います。一昨年の夏、私は広島でその生徒さん達から直接話を聞き、絵を拝見しました。素晴らしい少年・少女達で、感動した記憶があります。

青年劇場の俳優さん達がその時の状況を演じます。被爆の実相を風化することなく、現在に、将来に継承していく、貴重で有意義なことです。ぜひ大勢の人に観ていただきたいと思います。「あの夏の絵」をお見逃しなくご鑑賞くださるようお奨めいたします。

2017年・秋

東京都原爆被害者協議会・会長  
一般社団法人東友会・代表理事

大岩 孝平